

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成21年 5月 第99号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

介護報酬の改定—介護の未来を切り開く途

この4月より介護報酬が改定されました。2000年の発足後3回目の改定で初めて引上げられましたが、基本単価の引上げではなく、様々な要件を付した加算方式でした。各事業所はこの1ヵ月間、要件を満たす為の調整や、裏づけ資料の作成・提出にと、煩雑な作業で忙しくなり、この5月の連休明けに初めての請求事務が待っている中で、連休もゆっくり休める気分ではないと思います。

『3%・1人2万円アップ』の事前の掛声の中で、蓋を開けてみると複雑で細かな加算方式であり、掛声通りの増収が見込める事業所は殆ど見当たりません。私共の事業所でも総体としては、年間総収入に対して0.5%程度の増収が見込める程度であり、引換えに、絶えず煩雑な事務作業が付きまとう中では、むしろ人件費が増え、減収になるようにも思います。

市場原理、を標榜して始めた介護保険制度は、保険事故を起こしていない要支援ランクへの予防給付を導入し、保険制度としては異例な形で発足しました。そして5年後の見直しで、予防重視型システムへの転換として要支援ランクを2段階に増やし、要介護にさせない効果、重度化させない効果を介護に求め、機能訓練や栄養改善など様々な要件を設定して加算します。

市場は、事業者が介護現場で柔軟に創意と工夫を凝らし、利用者が真摯に判断して選択し、サービス向上に反映されるシステムですが、現状は、制度が益々複雑になり、細やかな加算要件を付してサービス管理を徹底しようとして、市場の持ち味が徐々に薄れていくように感じます。事業者も、利用者も、サービス内容に関しての思考を停止してしまい、制度に添ってのみ運営し選択しているように見え、非常に残念な思いがします。

《次ページに続く》

せいりょう園 渋谷 哲



《前ページより》

そのような中で最近、タレントの清水由貴子さん(49才)の自殺が話題になっています。40年以上前に亡くなった父親の墓の前で、要介護5の母親(79才)の横で自殺していたのです。介護サービスを利用しながらも、出来る限りの事は自分でしたい、との意思が強かったと言われていました。

そしてもう1人、妻の南田洋子さんを介護する俳優・長門裕之さんが話題です。認知症になった南田さんと介護する長門さんの様子がテレビに映り、夫は妻への『贖罪』だと言います。

詳しい事が判らない中で断定は出来ませんが、報道を通じて共通しているのは、介護の大変さや介護者の懸命さが強調される一方で、要介護になり認知症になった母や妻の、今の姿での生きる価値には言及していない事です。

老いて要介護になり死を迎えるのは、生命あるものの宿命として、自然の摂理に添った自然な姿です。人には、要介護になり、認知症になっても、宿命としての死を迎えるまでを懸命に生きる権利と責任があります。要介護になり認知症となったその姿は、かつては少数の高僧が修行をして目指した生き仏への途に、長寿社会が実現した今では、多くの高齢者が自然に辿りついている姿にも写ります。

社会を構成して生きる人間は習性として、他者を意識するとき全力を尽くして懸命に生きよう、とします。社会人として高齢期まで生きてきた人は、正に社会生活の適者であり、他者を意識して生活する中でこそ今までと同じように、懸命に生きることが出来るのです。其処に、家族のみで抱え込まない介護の社会化の意味があり、介護の専門性が成立する根拠が存在します。

宿命としての死を受容して、ベストを尽くして懸命に生きる認知症の人の姿は、家族への最後の贈り物であると同時に、其処に係わる全ての人にも、遺伝子では伝わらない貴重な精神的な営みを伝える、尊いプレゼントです。其処での苦悩や葛藤の経験が、思想や信仰を生み、介護の専門性を育みます。

老いて要介護になった時、家族の熱意と愛情が全てを包み込む生活が最善なのではなく、人生を締め括る最期の姿であるからこそ社会人として、家族と縁ある他者とが協働して創る暮らしの中で生命を完結させたい、と願います。

要介護の人の暮らしに、認知症の人の姿に、生き仏にも通じる尊い価値を見出し、介護職として、介護に係わる喜びを多くの人と共有し、協働の輪を広げるとき、介護報酬の評価にも大きく反映されるように思います。

超高齢社会が進行し、老いと死を生きる高齢者が益々増えていく中で、その老いと死の過程にこそ、最も普遍的な価値が潜んでいる事を介護職が確信し、思考を停止せずに現場での創意と工夫を発信し続けることが、介護の未来を大きく切り開いていくのだと考えています。

1年を振り返って

介護士 富田 徹

去年の6月に参加させていただいた新人研修会で講義の最後に先生が、「介護という仕事の全体像が見え始め、楽しみが感じられるようになるのは2年目に入ってから。とにかく1年目は様々なことに戸惑いを感じ、悩み、大変しんどい思いををするでしょうが、めげずに頑張ってください」と、そのようなことを言われていました。その時は「そんなものなのかなあ」と呑気に聞きとめていましたが、入社して1年が過ぎた今、今日までのことを振り返ってみて「本当にそうだった」と実感しています。

特養本体での業務と並行しながらの各事業所への研修に始まり、その後、特養ユニットへの配属となり新しい環境に慣れることと業務内容を理解する事に精一杯で、何が何だか分からないまま半年が過ぎました。そして、あれよあれよという間に夜勤の業務も始まり、不規則な生活のリズムに身体が上手く適応できず、疲労と不安を感じながら1年が終わりました。

どんな1年であったかと言われれば「想像以上に厳しかったです」というのが正直な感想です。でも、お年寄りと関わっている時、不思議とよく笑っていました。最初の頃はどなたの顔も同じ様に見え、名前を覚えることすらままならず、話しかけては何の反応も無かったり、突然怒鳴られたり、泣き叫ばれたり、介助については牛乳を顔に吹きかけられたり、腕を噛まれたりと、どのように接して良いのか分からず、戸惑いの連続でした。しかし、先輩に色々教わったり、日々の関わりを通していくうちに、少しずつお年寄り一人ひとりの個性や特徴が分るようになりだし、気付けばお年寄りの側にいることが楽しくなっていました。決して上手な関わりや介助が出来ている訳ではないのですが、それでも優しく温かく接して下さるお年寄りには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。また、いろんな面において至らない点が多々あったにも関わらず、寛大にのびのびと仕事をさせてもらった先輩職員にも同様に感謝の気持ちで胸一杯です。

まだまだ分からないことも出来ないことも多く、相変わらず緊張と不安の日々が続いています。この先、講義の先生が言われていた「介護の楽しみ」を少しでも多く実感できることを期待して、2年目も頑張っていきたいと思います。



五月晴れの5月11日、平荘町・称専寺の宮内正樹住職を講師にお迎えし仏教講話を拝聴しました。受講者はデイサービス、ケアハウス、特養、グループホーム、小規模多機能型ホームの各利用者をはじめ職員、実習生それに地域の方々ら25人。宮内住職のお話は穏やかなやさしい口調で、まずタンポポの花言葉から始まりました。要旨をご報告します。

たんぽぽの黄色は幸せの象徴、花言葉は「幸せのたより」「幸せを撒き散らす」。その綿毛は風によって遠くまで飛んで行って根づき、また花を咲かせます。たくましい生命力です。

綿毛を運ぶ風の姿は見えませんが、なびく草の上にその存在はあります。目には見えないけれども、重力や空気のように、計り知れない力がかかっている。仏教では「冥加」（ミョウガ）といいますが、わたしたちはその冥加によって知らず知らずのうちに支えられています。

人の世を「人生」といいますが、まず、「人」という漢字を見てみましょう。テレビドラマで人気があった金八先生は、この字を人と人が支えあうとおなじみですが、この字をよく見ると小さい方が大きい方を支えています。よくよく考えてみますと、われわれ人間は他の生き物を食べて生命をつないでいます。食事の前の“合掌”と「いただきます」は、他の命を「いただく」ことに対する懺悔（仏教では慚愧（ザンギ）といいますが）申し訳ないという気持ちと、多くの命によって生かされていることに対する感謝の気持ちの表れです。「人」という字は陰に隠れている無数の弱いものが、形に表れているものを支えているという字とも伺えます。

次に「生」という漢字ですが、この字は上下二つに分けられます。下は土、上は草の芽を表します。草の芽は成長してやがてきれいな花を咲かせますが、花一人の力ではない見えないところで土があるからこそ、存在します。「生」は一般的に“生きる”と送り仮名をうちますが、本来漢字の成り立ちから言いますと、土によって“生かされている”と読むべきで、これら見えない陰の働きを私たちの先人は、前に“お”をつけ、さらに後ろに“様”をつけ「お陰様」と表現してきたように、ありとあらゆる見えない支えやお陰によって存在しています。そのことは、この世の生きとし生ける全てのものが共通にして言えることです。しかし、われわれ人間は「人」の字で示したように、一本の支えだけでは生きていけない存在です。人間は精神的に弱いものです。国内の自殺者も年間3万人を越えています。

そこで人間にとって不可欠なものが、「宗教」なのです。「宗」という字ですが、「むね」とも読み、意味は“抛り所”とか“支え”です。上には屋根(うかんむり)があり、その下の“示”には二本の支えがあります。つまり、仏様の“知恵”と“慈悲”という二本の支えなのです。

知恵の働きは、私たちは生きているのではなく生かされていることに気付かせてくれます。慈悲の働きは、“慈”はサンスクリット語でマイトリー(同感)“悲”はカルナー(呻き)という意味です。漢字でいいますと、“慈”は心の上に糸の束が二つ並んでいる形で“同じ立場に立つ”という意味。“悲”は心が左右に引き裂かれる形で、悲しみが極限状態にきた時の“呻き”です。「辛いですね。」その気持ちに同感して、一緒に悲しんでくれる。その感情は、子に対する母親の愛情に似ています。母の愛情は我が子のみですが、仏様の慈悲は、あらゆる人々に注がれます。経典には「仏心とは大慈悲これなり」とありますように“慈悲”に“大”が付きます。また、経典に「慈雨」とか「澍法雨」とあり、降る雨が乾いた大地を潤すように、仏の慈悲の働きはありとあらゆるものに注がれ潤すのです。つねに降り注いでいるお慈悲の雨を、私たちは煩惱(欲望)という名の傘をさしてそれを遮ってしまっているのです。煩惱が邪魔をして仏のお姿を見ることも触れることもできない。見えないけれども、つねに私たちを見つめ、見守って下さる。その仏様のお心を深く味あわせていただくことが大切なことではないでしょうか。

風は見えないけれど、その風の姿は、綿毛を運ぶ草の上にその存在が感じとれる様に、仏様の働きは目に見えないけれども、私たちに計り知れない大きな力が注ぐ。その結果、たんぼぼの綿毛が飛ぶ様に、仏様に対する感謝の気持ちが“ありがとうございます”という言葉(お念仏の声)となって飛んで行き、あらゆるところに幸せ運び、幸せを撒き散らすのです。

身近なタンポポや漢字の話から講話は広がり、傾きながら聴く方、メモをとる方と熱心な皆さん。にこにこ顔で、それぞれお迎えの職員と会場を後にされました。

ケアハウス等空き情報

<平成21年 5月18日現在>

ケアハウス

・キャッシル真和	: 1 人部屋 1 室	・青山苑	: 1 人部屋 1 室
・シスナブ御津	: 1 人部屋 1 室		: 2 人部屋 1 室
・ウヰヰッグ はりま	: 2 人部屋 1 室	・アゼリア	: 1 人部屋 1 室
・香楽園	: 2 人部屋 2 室		: 2 人部屋 1 室

[問合せ]せいりょう園介護相談室

(079)421-7156/(079)424-3433

介護者の集いー認知症サポーター養成講座ー
テーマ「認知症とはどういう病気か？」

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一



4月24日に介護者の集い「認知症サポーター養成講座」を開催することが出来ました。加古川市社会福祉協議会にも協力していただき、たくさんの地域の方々、ボランティアの方々に参加していただきました。実際に、認知症を患っているせいりょう

園の利用者の方々にも参加していただき、職員を合わせると合計50名の参加がありました。

前半は、「認知症とはどういう病気か？」というテーマで、キャラバンメイト武井より、認知症は誰でも成り得る病気であり、私達となんら変わりのない一人の人間であるということと、せいりょう園での認知症を患っている方に対する介護の方針を話しました。その後、「認知症サポーター養成講座100万人キャラバン」DVD鑑賞をしていただきました。

後半は、7人を一つのグループとして、グループワークをさせていただきました。

ここで、認知症サポーター養成講座で使用している冊子の中にある、サポーターの役割とされる事例を紹介します。

事例

一緒に買い物にきた家族から連れがはぐれてしまったという訴えを受けたスーパーJ。あらかじめ作成してあったマニュアルに沿って、まず、館内にいるうちに探せるよう手早く、同行者の了解をとって館内放送をした。名前だけでなく、年齢、服装の特徴などの情報を放送したところ、近くにいた人からの連絡でことなきを得た。家族のほっとした様子に救われた。

館内から出ていってしまうと事故なども心配なので、手の空いている人を出口に急ぎ配して水際作戦も忘れないようにしてあった。

この事例では、家族とはぐれてしまった認知症の方を発見し保護する為に、水際作戦という形で店から出さないようにしています。はたして、出口を封鎖して、発見

して保護をすることがサポーターの目的なののでしょうか？認知症を患っている方も私たちと同じ権利を持つ人間であることをふまえた上で、グループごとに考えていただきました。

皆さんの意見

・グループの中に実際に家族の介護をしている方やボランティアをされている方、地域でふれあいいいききサロンを運営している方、認知症サポーターに興味がある地域の方など、様々な立場の方が参加されていて、それぞれの立場からの意見が聞けて参考になった。

・確かに店の出口を封鎖して、認知症の人を出ないようにすることは閉じ込めているようにも思いますが、家族の側から考えると、事故が心配だし、現実では出て行かされると本当に困る。

・実際にせいりょう園の利用者の方が、徘徊途中に家に尋ねてきたことがあった。その時は何故私の家なのかとびっくりしたが、今日の話聞いて、認知症の病気の症状であるということが分かった。

・認知症の方の意見：夫を介護し看取りました。これからの残りの人生は自分らしく過ごしたいように生活していきたいと思っています。ボーイフレンドでも探そうかと思います。

・せいりょう園では、日中は玄関のカギを閉めていません。認知症の方が外へ出て徘徊されると、後ろから職員が見守りで付いていき、出来るだけ本人を尊重するという介護に努めているが見守りが出来ずに一人で外出することがあるとのこと。その際には、この養成講座を受けたオレンジリングを持っているものが、やわらかく見守っていけるような地域になっていきたい。



以上、様々な意見が出ました。非常に良い雰囲気の中、テーマにこだわらず、自由に話していただけたのではないかと思います。

ケースバイケースでこれが正しいという対応はありませんが、この事例で行った水際作戦のように発見して保護をするという目的だけがサポーターの役割になってしまうと、結局、認知症の方が自分らしく暮らせることには、つながらないのではないかと思います。自分が認知症になった時に同じように水際作戦をしてまで保護されたいかどうか。認知症を患っている方も私たちと同じ権利を持った人間であるという視点が必要になってくるように思います。

今回の介護者の集いには実際に認知症を患っている方も参加されていました。グループワークにも参加していただき、自分の意見を話していただきました。認知症を患っている方が私たちと同じように、物事を考え、何らかの意志、理由があって行動されていることがお分かりになったのではないかと思います。本人にとっては、理由があ

っての行動なので、その行動を水際作戦などという方法で止めてしまうことは、自尊心を傷つけてしまい、逆効果になってしまうことがあります。

介護者の視点も忘れてはいけないと思います。家であろうと施設であろうと日々葛藤して介護をしていることは事実です。だからこそ、多くの方にサポーターになっていただき、介護者だけが抱え込んでしまわないように、地域で見守っていくことの出来る取り組みが必要なのだと感じています。

また、自尊心を傷つけないような関わり方や、地域でどのような取り組みが出来るのかを今後の介護者の集いでお話していきたいと思っておりますので、今後とも参加していただき皆さんの意見を聞かせていただきたいと思います。

6月の介護者の集いは？
テーマ「利用者の外出について」

せりょう園では、日中は玄関のカギを閉めることはありません。認知症の方が外に出られた場合、後ろから職員が見守って付いていながら行きます。何故、カギを閉めないのか？私達と同じ権利を持つ人間であるということ、実際に付いていく職員の思い、地域の皆さんから見た認知症の方の徘徊、様々な視点から話し合うことが出来ればと思っています。

せりょう園 5月の行事

5月 6日(水)	お話グループ・福寿草の会 音楽療法	5月20日(水)	お話グループ・福寿草の会 自彊術療法
5月 8日(金)	誕生日会 ひより手芸教室		音楽療法 郷土料理の日(鮭の混ぜ寿司)
5月 9日(土)	園長との懇談	5月22日(金)	ひより手芸教室
5月11日(月)	仏教講話(称専寺宮内ご住職)		介護者の集い
5月13日(水)	自彊術療法 音楽療法		～これからの介護保険の使い方
5月15日(金)	昼食会(お好み焼き)	5月25日(月)	理容の日
5月18日(月)	美容の日	5月27日(水)	自彊術療法 音楽療法

第16回木野雅之ヴァイオリンリサイタル



♪ プログラム ♪

1. クライスラー: おもちゃの兵隊の行進曲
2. ベートーヴェン: クロイツェルソナタ
3. リスト: 悲しみのゴンドラ
～ 休憩(ドリンクタイム) ～
4. ドホナーニ: ハンガリー牧歌
5. メンデルスゾーン: 歌の翼に
6. ストラヴィンスキー: 田園
7. パガニーニ: ラ・カンパネラ

Photo by Mr. Kazuya Akashi